京都大学文学研究科　グローバル COE　「親密圏と公共圏の再編成をめざすアジア拠点」

学会発表渡航支援報告書

（ふりがな） 氏　　名	かとう　あつふみ 加　藤　敦　典	所属・職名 東京大学・特任助教
発 表 題 名 （英　　語）	Reconstructing the Public through Official Mass Organizations: Interpretative Conflicts in the Collectivity of the Vietnamese Women's Union	
著　者　名	Kato, Atsufumi	
会　議　名 （英　　語）	The 2012 Annual Conference of the Association for Asian Studies	
開催地（国、市）	カナダ国トロント市	
参 加 期 間	2012 年　3 月　15　日　～　3　月　18　日	

表記の国際学会において、アジアにおける女性の親密圏と公共圏の形成についてのパネル "Reconstruction of Intimate and Public Spheres in Asia: Circumstantial Nexuses of People with Child Birth and Child Care in Japan, Malaysia, Taiwan, and Vietnam" を組織し、自身も研究報告をおこなった。

このパネルでは、出産と育児の困難に直面したときに出現する情況的な相互扶助関係に焦点をあて、マレーシアの国内移民の育児ネットワーク、台湾の水子信仰と女性の親密／公共圏の形成、ベトナムの都市部におけるストリートチルドレン支援の事例などに関する報告がおこなわれた。

申請者の報告では、ベトナムの村落部の婦人会の妊産婦への支援について論じた。分析事例として、「文化」的（＝善良な公民）でないと認定された世帯の妊婦に対する支援の可否をめぐる会員たちの議論をとりあげ、いっぽうで、近隣住民としての扶助の倫理、他方で、官製大衆団体としての「公民」の倫理が拮抗する様子を描いた。

申請者の報告に対しては、「夫の酒グセの悪さが、なぜ妻への支援の可否をめぐる議論に影響するのか」、「婦人会以外にも日常的な女性同士の助けあいはないのか」といった質問があった。また、セッション終了後には、フロアで参加していたトロント大学の Hy Van Luong 教授（文化人類学、ベトナム地域研究）から、親密圏の「再編成」という問題設定について、意見をいただいた。Luong 氏の意見によれば、たとえばベトナムの場合、家族にかわるオルタナティブな社会的ネットワークは過去も現在も強固に存在しているので、親密圏の再編成という議論はうまく当てはまらないのではないか、とのことであった。たしかに、親密圏の再編成という議論は、アジアで言えば、日本や韓国や台湾など、「愛情家族」と「福祉国家」の体制がいったん成立し、その後、それにかわる体制が模索されている地域にはよくあてはまる議論だと考えることができる。しかし、ベトナムのように、愛情家族や福祉国家が十分には確立しないまま、拡大家族・親族集団、近隣関係、女性同士のネットワークなどが一定の機能を果たし続けている状況のもと、さらに「次」の社会へと向かって動いているような社会の分析には、何か別の問題設定が必要なのかもしれないと考えることができる。

なお、このパネルには、本 GCOE 関係者（櫻田涼子氏、Daniele Belanger 氏）をはじめ、カナダ、

京都大学文学研究科　グローバル COE　「親密圏と公共圏の再編成をめざすアジア拠点」

学会発表渡航支援報告書

アメリカの若手研究者（アジア地域研究、アジア女性文学）が参加した。その点において、GCOE の趣旨である次世代研究者のネットワークの構築にも資するものであった。

GCOE での私たちの研究活動を英語で出版するアイデアについてヨーロッパの出版社の編集者と面談して話し合いをする機会もあり、有意義な学会参加となった。